

和光大学の先生たちに

いま、きみたちに読んでほしい本を

三冊ずつえらんでもらった。

これはその第三集。

第一集、第二集を出した二〇〇四年度から六年。

先生の顔ぶれも変わった。

前からいる先生も、また違う本を紹介してくれた。

読みたい本が見つかれば言うことなし。

先生の表情を思い浮かべるのも楽しいし

暇つぶしでもかまわない。

ばらばらめくってみて、自分の好奇心のおもむくままに

たのしく読んでください。

卒業後もあなたとともに旅する本

奥須磨子（図書・情報館長）

その春に卒業したゼミ生から便りがあった。
梅雨明けもそろそろかと思うころ、

メールでなく、電話でなく、葉書で届いた。
葉書の最後に、こうあった。

「卒論と何冊かの本は持ってきましたが、
今は大学時代が遠い昔のことのようです。」

返信は、こう結んだ。

「二十年もすると、

大学時代がついこの前のことのようになるでしょう。」

その卒論と何冊かの本が、

ずっと傍らにあって彼を励ましてくれるように、願いながら。

先に書いたのは、失礼ながらも若いとは言えない、ある大学教員から聞いた話です。いろいろ同感です……と言って別れた後、何に一番同感したのか、電車の中でしばらく考えました。

私にも、大学時代に出会って、その後の何度かの引っ越しのたびにダンボール箱に詰めて運んだ本たちがある。見返しに買った日付を記した本。その時は買えなかったけれども、後に古本屋で手に入れてうれしかった本。和光大学の教員サロンで、ああ、この人があの著者なのかと知った本。帰宅して、函にシミが浮かんだ本や背表紙が日焼けしてしまっている新書など、ちょっとした間、眺めました。いつもいつも手に取るわけではないが、そこにあるだけで、私を励ましてくれる本たち。

今回の『本を読もう！』は、二〇〇四年の第一集・二〇〇五年の第二

集に続く、第三集です。三集めともなれば、和光大学の刊行物として定着したと言っているですね。

今回は、三十三人の先生が、前の二集と同じように、「三冊の本」をあげてくださいました。それぞれの「三冊」が個性的で、重複してあげられたものは一冊もありません。ジャンルも多様、刊行年も最新のものから一九五〇年代のものまであります。きっと、先生がその大学時代から大切にされてきた本も含まれていることでしょう。

図書・情報館では、前の二集、図書館員と職員の人たちによる『本を楽しもう』―『本を読もう!』職員版―(二〇〇八年)、Let's Read Project 学生メンバー選りすぐりの文庫本『150 (ワコオ) 文庫』(二〇一〇年) にあげられた本たちも、あなたを待っています。これらの情報は、「和光大学ホームページ▽梅根記念図書・情報館▽図書・情報館について▽図書・情報館の刊行物」で見えることもできます。

手に取り、そして、あなたと旅していく本に出会ってください。

きみたちに

ぜひ読んでほしい本を

三冊あげると……

米田幸弘 (現代社会学科)

①『私のように黒い夜』J・H・グリフィン (ブルース・インターアクションズ)

②『死を見つめる心——ガンとたたかった十年間』岸本英夫 (講談社文庫)

③『必死の力・必死の心——21世紀を生きる全ての人たちへ』黒崎健時 (日本スポーツ出版社)

①——黒人を本当に理解するには、黒人になるしかない……。グリフィンはそう考えて肌を黒く焼き塗り、黒人としてアメリカ南部の旅をはじめた。公民権運動が始まる前の一九五九年のことである。現在よりもはるかに黒人差別が酷い時代のことだ。黒人に変身したとたん、同じ仲間であつたはずの白人たちは恐怖の対象と化し、生命さえ脅かす危険な存在となる。白人として生きていたときには想像もつかなかったような、黒人のもつ悲しみや恐怖、絶望を彼は体験するのである。穏やかだが迫力ある筆致で描かれたこの記録は、人種の壁にとどまらず、人と人が分かり合うことの困難さについていろんな気付きを与えてくれる。二〇〇六年に復刊された

バージョンでは、その後の経過や解説的なあとがきも加わってさらに充実の内容となっている。

②——自分の死とどう向き合えばよいのか、という問題に対して、私に最も納得のいく答えを与えてくれたのが本書である。筆者は、古今東西の宗教が「死」をどのように捉え、意味づけてきたのかを整理して論じたうえで、自分自身はいずれの宗教的な説明にも納得できなかったと述べる。近代人であれば、同じように納得できない人は数多くいるのではないか。そういう人たちが、どのように自分の死を納得して受け入れていけばいいのか。岸本氏自身が見出した答えについては本書を読んでもほしい。宗教学者としての見識に加えて、ガン闘病の体験による思索の深まりが生み出した名著といえる。

③——若い人たちのほとんどは知らないと思うが、知る人ぞ知る伝説の格闘家による書である。大山倍達の片腕として初期の極真空手を支え、後にキックボクシングの世界で多くのトップ選手を育てた「鬼のクロサキ」が、己の波乱の人生を振り返

りつつ、若者にむけて熱いメッセージを語るといふ内容。元氣を出したいとき、モチベーションを高めたい時は、スタミナドリンクを服用するようなつもりで本書を読んでみよう。下手な自己啓発本よりずっと効く。特に自身の半生を語る前半のくだりはムチャクチャである。メーターの振り切れたような彼の行動の前では、生半可な根性論や精神論など吹っ飛んでしまうのである。

村井紀

(総合文化学科)

①『ガリヴァー旅行記』 スウィフト (岩波少年文庫)

②『道草』 夏目漱石 (岩波文庫)

③『惜みなく愛は奪う』 有島武郎 (岩波文庫)

①—スウィフトの『ガリヴァー旅行記』が面白い。冒頭にこんな本を挙げると、なんだこどもの本じゃないかとあしらわれそうだが、しかしもとは風刺文学で、こ

こに出てくるヤフー(人間のような獣)こそわれわれだと思ふことがしばしばある。ほかならぬ「家畜人ヤプー」(「ニホン」とも関わり、検索エンジンヤフーとも縁があるらしい。漱石を通してスウィフトの底深いニヒリズムに驚愕した。

②—私は日本で世界レベルにあるのは、二〇世紀日本文学だと思っている(マンガもこれあって世界レベルなのである)。科学技術などはニホンもへったくれもないものだからだ。ドストエフスキーの『罪と罰』のラスコーリニコフは、間違いく私だとしても、彼のようにソーニャ(「カミ」)にひざまずく気にはなれない。しかし中年になってハマッタ夏目漱石の『道草』などは、権力やオカネによって人(「自分」)がどう変わるかを知る上で——自分をつかむ上で——欠かせない。戦争・革命以外ではヒトは容易に殺戮に走るものではないが、便利なオカネはキミのこころを奪い、何をしでかすかわからない。大学生ともなれば、もうすっかり生活の泥沼にハマッている。『道草』の健三は、四十歳過ぎの、明日のキミである(社会人になったら読む！)。

③―少し題名は恥ずかしいが、有島武郎の『惜みなく愛は奪う』（岩波文庫）も読むことをすすめる。恋愛・愛は収奪する！ということ問い詰めた傑作である（恋愛したら読む！）。

結局、「永劫」を前にカミなしで生きるコツを教えてくれるのは、この三人くらいである。この社会がどうなろうとも、問題の核心はキミだ。キミなしに世界はない。三人は、キミの闘争を助けるだろう。なお彼らは文学を社会的かつ理論的に考え、「自己表現」という立場をとった。「文学はカミがもたらした」（折口信夫など）とは絵空事である。「前途は遠い。そして暗い。しかし恐れてはならぬ。恐れなものの中に道は開ける。」（有島武郎「小さき者へ」）

宮崎かすみ（総合文化学科）

①『彼岸過迄』夏目漱石（新潮文庫）

②『幸福な王子』ワイルド（新潮文庫）

③『乙女の密告』赤染晶子（新潮社）

①―『こころ』を挙げたいところだが、あまりに定番なので、あえてこの作品をお薦めしよう。他の作品ほどには知られておらず読まれることも少ないようだが、これの特徴を一言でいえば、探偵嫌いの漱石が書いた推理小説、とてもなるか。探偵嫌いの作者だけあって一筋縄では行かない。探偵もどきの登場人物は間抜けなお調子者で、できそこないのホームズみたいだ。だが、できそこないホームズは狂言回しにすぎない。漱石は推理の矛先を人間心理に向けて、ぐいぐいと人の心の深部をえぐってゆく。女主人公、千代子が須永に向かって言い放つ「貴方は卑怯だ」に始まる言葉はものすごい。その鋭さと深さと呵責なさにおいて、近代日本文学中のヒロインが放った科白の白眉である。

②―この本には表題作品の他、『わがままだ大男』や『漁師とその魂』、『星の子』などの童話の佳品が収められている。今ワイルドと言えば、同性愛裁判にかけられ

たあげくに投獄された悲劇の作家を思い浮かべる人が多いだろうか。リヒャルト・シュトラウスがオペラに仕立てた『サロメ』の原作者だと知っている人はどれだけいるだろう。この人が、じつはみんなが子どものときに読んだ、『幸福な王子』を書いたと聞いたら驚くかもしれない。表題作品を始めとしてここに収められている童話作品はどれも、到底『サロメ』の作者の手になるとは思えない、静謐で雅趣に溢れた寓話だ。何よりもこれらの佳品は、『ぼくは哲学を物語で語るのだ』と嘯いたワイルドの、その「哲学」の珠玉の表現なのである。

③—まだ若い書き手なので表現が稚拙な処もあるが、趣向がおもしろい。京都の外語大の女子大生たちが、『アンネの日記』の暗誦大会に挑戦する過程がプロットとなっている。この装置によって、現代日本の京都というトピクスと『アンネの日記』の言説空間が交錯し、『アンネの日記』をメタテクストとしながらその批評でもあるという、特殊な小説構造が現出した。「戦争が終わったら(ユダヤ人性を捨て去り)オランダ人になりたい」と語るアンネに対して、ユダヤ人という「他者性」こそがアンネのアイデンティティの拠り所なのだとして、彼女を「密告する」主人公。筆

者のように芸のない研究者が論文で扱うようなテーマを、見事に小説に仕立てあげた。その手腕及び志の高さと、アンネに異議を申し出た豪胆さに拍手したい。ただし筆者はこの点について、作者と見解を共にしないが。

水野谷剛

(経済学科)

①『成長の限界——ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ドネラ・H・メドウズほか

(ダイヤモンド社)

②『ガイアの復讐』ジェームズ・ラブロック (中央公論新社)

③『メキシコの青い空——実況席のサッカー20年』山本浩 (新潮社)

①—『沈黙の春』と並び、環境を学ぶ上で古典的な本の一つ。「ローマ・クラブ」は一九七〇年にスイスで設立された民間組織で、世界各国の学者や経営者などがメンバーとなっている。ここでは、数学的モデルによって、環境的側面を考慮した将

来人口や経済の動向などが予測されている。実際のモデル式は明らかにされていないが、未来予測が具体的数字によって明らかにされており、四〇年ほど前に予測された現代と未来はどんなものかがわかる。

②—ジェームズ・ラブロックは、「生命圏が地球気候と大気組成を、生物が生きていくうえで最適な状態に調整・維持している」という「ガイア仮説」を提唱し、地球そのものが一つの大きな生命体だと考える学者である。経済活動の動向により、化石燃料の使用量や自然資源発掘量が増減するなど、現代社会において環境と社会経済は相対立する概念であるが、ときに互いに作用し合う命題でもある。その複合化されたシステムを生物になぞらえ、その対処法を提言している。

③—南アフリカで行われたW杯が記憶に新しいが、この本は、NHKで長年サッカーの実況に携わってきた、山本浩アナウンサーの語録と手記である。国際舞台でなかなか活躍出来なかった時代から、W杯の常連となった現在までの日本サッカー界の歴史を、実況という立場から綴っている。特に一九九八年W杯フランス大会日

本対アルゼンチン戦と二〇〇二年W杯日韓大会日本対ベルギー戦の項は、サッカーファンであれば必読に値するものと思う。

三上豊

(芸術学科)

今回は、前の二回と違い、二〇一〇年夏の読書から選出した。

- ①『ゴダール、わがアンナ・カリーナ時代』山田宏一 (ワイズ出版)
- ②『書物の変—グーグルベルグの時代』港千尋 (せりか書房)
- ③『隠蔽捜査』今野敏 (新潮文庫)

①—山田宏一の映画本はどれもすばらしく、学生時代から愛読してきた。近年では学習院の彼の講座にもぐりで聞きに行ったこともある。本書は、昔、名画座や草月ホール、新宿文化でみたゴダールの映画を楽しくも懐かしく甦らせてくれた。

②―ゼミの後期のために教科書を再読したのであげておく。写真家で評論家、教育者でもある著者の軽快なフットワークから送り出される、近年のアートと本をめぐるエッセイ集。グーテンベルグでないのが私には寂しいが、本や美術の未来を考えるうえで興味深い視点がでている。

③―酷暑のお盆、中毒になって読んでいたのが、今野敏の警察モノ。なにげに本屋で手にしたのがはじまり、ずるずると中古本屋で買いだめ、二十冊近くはまってしまった。最初に読んだ『隠蔽捜査』（新潮文庫）をあげておく。先の港の本には当たり前だが、今野の『蓬莱』にはベンヤミンもでてきてびっくりした。

松枝到

（総合文化学科）

①『語学者の散歩道』柳沼重剛（岩波現代文庫）

②『近代科学の源流』伊東俊太郎（中公文庫）

③『図書館愛書家の楽園』アルベルト・マンゲル（白水社）

①―ギリシア・ラテン文学の大家が、西洋古典学をめぐる大学の授業中、ふと漏らした余談を集めたものという。ことわざの「大山鳴動ねずみ一匹」が前一世紀の詩人ホラティウスの『詩学』に由来するだとか、アリストテレスの学園のあったリュケイオンの森が、フランスの中等学校であるリセーの語源であるとか、桂文楽の十八番の落語が、じつはイソップ（アイソポス）の寓話が元だとか。にんまりと笑いながら読むのだが、読後、ああ勉強しなきゃと思わせる。こんな余談を吐きたいものだ。

②―古代ギリシア科学からガリレオ・ガリレイの登場までをたどる科学史の概説書だが、中世のラテン科学から、とりわけてアラビア科学の重要性に力点を置いている。古典古代（ギリシアⅡローマ）の文化遺産がアラビア経由で地中海世界に達するのがいわゆる「ルネサンス」だが、本書を読むとこの文化運動の意義がよくわかる。一九七八年に学生向けの叢書の一冊として出版されたものの再録だが、当時

の最新研究をふんだんに盛り込んでいて、いま読んでもまるで古びていない。

③—著者はアルゼンチン出身の作家・評論家で、幼くしてボルヘスの友人でもあった。さまざまな言語を自由に駆使し、また希代の愛書家でもある著者による書物・図書館の博物誌。最古の図書館から幻想の図書館へ、奇怪な書物、存在しない書物、また書斎のなかの愛書家たち。本好きにはたまらない一冊。とはいえ、原題は『夜の書斎 The library at night』という。表題がちがうので、原書をもっていたのに買ってしまった。しかし、それはそれでよい。図書館という宇宙を知るには最高の手引きだ。↓ Library は図書館でもいいけれど、ここでは著者の夜の書斎から生まれた書物をめぐる夢想という意味。ちなみに原義は「本屋」。

福田好裕

(経営メディア学科)

①『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』

岩崎夏海 (ダイヤモンド社)

②『マネジメント——基本と原則』P・F・ドラッカー (ダイヤモンド社)

③『魔獣の鋼鉄黙示録——ヘビィメタル全史』イアン・クライスト (早川書房)

①—マネジメント論の大家であるドラッカーの理論を、AKB 48のプロデュースに関わる著者が、高校野球の女子マネージャーを主人公に応用するという一種の事例モデル提示型の小説である。ストーリーとしてよくできていて、読んで楽しめる。ここで応用されている考え方は必ずしもドラッカーだけが述べているものではなく、様々な理論をドラッカーが体系化したものに過ぎない部分もあるが、マネジメントの入門書としては最高のものである。

②—右記のものを読んでマネジメントの関心を持ったなら、ネタ本である本書を是非ひもといて欲しい。マネジメントは、企業・会社に関わるものとのイメージがあるが、一人ではできないことを複数の人が集まって実現しているという場である「組織」において、考慮すべき点を体系化・理論化したものである。本書に限らず、ドラッカーの著作は、比較的平易で読みやすく、どれもお勧めである。その中でも次に読むとしたら『イノベーションと企業家精神』（一九八五）かな。

③—本書は、音楽の一ジャンルである Hard Rock / Heavy Metal を一九七〇年の Black Sabbath 登場から二〇〇〇年ぐらいまで、シーンの動向を中心に、重要な作品やバンドをピックアップしているものである。音楽関係の書籍は、実際の音楽に触れながら読んでいかなければ、理解できなかったり、面白くなかったりする。背景などを知らなくても Aerosmith の楽曲にもあるように「Let the music do the talking」ということで、音楽そのものを楽しめばよいのであるが、知識が増えなければいくほど、新たな発見もあり、より深く楽しめるようになると思う。

半田滋男（芸術学科）

- ①『戦後美術盛衰史』針生一郎（東京書籍）
- ②『芸術の哲学』渡邊二郎（ちくま学芸文庫）
- ③『エディタースhip』外山滋比古（みすず書房）

①—みんなにとって、制作とはどういう行為だろう。「自己表現」、「好きだから」、「何となく」そんな答えが返ってくるのは分かっていて。だけど、芸術の歴史とは、時代時代の芸術家が漫然と自分のスキなことを描いた結果の集積ではない。常に時代のダイナミズムと関係して史的な意味合いを持つ作品が美術史を形成する。昨春、本学芸術学科の基礎を築かれた針生一郎先生が亡くなった。行動を伴って同時代美術とともに歩んできた一人の批評家の足跡。本学の、特に芸術学科の学生ならこの本くらい読んでいないと本当に恥ずかしい。

②―芸術っていう分野には根源的な疑問が付きにくい。「なぜ描く?」「感動ってなんだ?」「それで一体、何の役に立つんだ?」。時間をかけて真摯に考え、原典をひもといては先賢に教えを請うしかない。しかし如何せん原典は苦手だ。そんな人に薦める一冊。いささか安易だが。アリストテレス、ガダマー、フロイト、存在論美学の系譜が分かりやすく解説されている。本来放送大学の教科書だったらしいが、飲み込みが悪いことには自信がある私も、この本に随分助けられた。

③―編集とは、本や映像をつくる技術だけど、その真を問われれば、表現者（作家）と受け手の関係を如何に上手く取り持つかということに尽きる。だから編集者はもちろん、学芸員、演出家、司書、教員の仕事、はたまた普通の人の通常の日常生活でさえ、常に編集作業を行っているわけだ。編集について細かな各論（技術）を教える本はいっぱいあるけど、「編集哲学」を語る書物はそんなにない。大学生にはお馴染み『思考の整理学』の英文学者外山滋比古氏によるエディター（編集者）論である。それにしてもこの著者はなんて比喻が上手なんだろう。いたる箇所に箴言が散りばめられている。

橋本裕臣

（芸術学科）

①『私のギリシャ神話』阿刀田高（集英社）

②『近代彫刻史』ハーバート・リード（言叢社）

①―一口にギリシャ神話と云っても、ギリシャが拡大するに従って、各地の神話や言い伝えを取り込んで出来たもので、多くの矛盾を含んでいます。本書は阿刀田氏がエーゲ海の緑の島々を実際にめぐり、神話の時代に思いをめぐらせ著したものです。また氏独特のユーモアをまじえながら著したもので楽しく読むことができます。

②―絵画の歴史書は多くありますが彫刻のそれはほとんど見当たりません。特にロダン以後現代までの彫刻の歴史を解析するのはきわめてむずかしく、リードによって初めて秩序立てられたと考えると良いと思います。

野中浩一

(身体環境共生学科)

- ①『「夜ふかし」の脳科学——子どもの心と体を壊すもの』神山潤 (中公新書ラクレ)
- ②『宇宙怪人しまりす医療統計を学ぶ』佐藤俊哉 (岩波科学ライブラリー)
- ③『知に働けば蔵が建つ』内田樹 (文春文庫)

①——朝四時まで起きている夜更かし生活をしていても、正午までしっかり八時間寝ているから大丈夫だと嘯いているあなた。ぜひ一度本書をご覧あれ。気づいていない人もいるかもしれないが、現在の日本は、有史以来人類が未体験の（大げさに言えば人類史上初めての）環境が私たちにどんな影響を及ぼすのか、壮大な実験をしている。人口の減少、高齢者割合三十％超、未体験の一人っ子割合や核家族割合、一人一台携帯所持、史上最低の乳児死亡率……。そうした未体験ゾーンが多くあるなかで、過去に例のない「超夜更かし社会」が将来何をもたらすのか、誰も答えを知らない。学生のみなさんは、この先五十年の間に、その結果を身をもって体験することになるだろう。

②——ざっと本文に目を通すと、得体の知れない「宇宙怪人」が登場する、一見掛け合い漫才のようなヨタ話にも見える。それなのに、テーマは「医療統計」（「疫学」と言ってもいいと思う）という難しそうな世界である。格調高い（？）岩波科学ライブラリーの一冊としては、このギャップに違和感をもつ人もいるらしい。しかし、本書は、気鋭の疫学者が、「率と割合の違い」「年齢調整の意味」「前向き研究と後ろ向き研究」など、「疫学の考え方」のやや面倒なポイントをかみくだいて説明しようとした他に例のない試みである。正直なところ、難しい概念はあいかわらず難しいし、気楽な文章でさらっと読めるために分かった気になるだけかもしれないが。

③——あっという間に、現代のリベラルおじさんとして、マスコミや出版界にひっぱりだこになった「タツルさん」の一冊。この著者の書くものの多くはウェブ上でも読める (blog.tatsuru.com) し、多くある著書のどれもがお勧めだが、「共生学科」の教員としては、とりあえず本書を挙げておこう。「共生」とは、気持ちが理解で

きる人たちとだけ共に生きること、ではない。共生の基盤に「共感」を必須とする人が唱える「共生」は、少しばかり眉に唾をつけて聞くほうがいい。そんな気にさせてくれる。ただ、タツルくんは話術が巧みである。闇雲に信じるのではなく、「こはちょっと違うよなあ」という視点ををもって読める学生であってほしい。しかし、悲しいかな、私はタツルくんの言説で共感するページに折り目をつけていくと、一冊で何十ページも折り目がつくことになる。タツルくんに共感できる人はオトモダチである。

額賀美紗子

（心理教育学科）

①『アメリカ下層教育現場』林 壮一（光文社新書）

②『「自分探し」の移民たち——カナダ・バンクーバー、さまざま日本の若者』加藤恵津子

（彩流社）

③『二つの祖国』全四巻 山崎豊子（新潮文庫）

①——鳴かず飛ばずのフリーライター生活をアメリカで送っていた自称「落ちこぼれ」の著者。あるきっかけから大学進学率1%の「落ちこぼれ」高校で、非常勤講師として「日本文化」の授業を教えることになった。最初は目を疑うような生徒たちの行動に途方に暮れる著者だったが、「触れ合う 向き合う」決意のもと、試行錯誤を重ねるうちに、生徒たちの低学力や無気力さの背後にあるアメリカ社会の闇に気づいていく。底辺校を通じて見えてくるアメリカの不平等と貧困、人種差別、家庭崩壊の問題、そして劣悪な環境の中で苦闘する教師と生徒の有り様が淡々とした文章で語られる。著者が、干支や相撲、浦島太郎や手塚治虫を使って、生徒の学習意欲を何とか喚起しようと奮闘するエピソードも面白い。

②——「ワーホリしたい」「語学留学したい」。これを読んでいる学生の皆さんの中にも、そんな希望を抱いて、外国での生活に思い馳せている人も多いのではないだろうか。日本人の若者たちが流れ込む大都市バンクーバーで、文化人類学者の著者はかれらの声に耳を傾けた。繰り返し聞こえてくるのは、「本当の自分を見つけるため、本当にやりたい仕事を見つけるため、日本を離れた」という「自分探し」の

語り。果たしてかれらは新天地で「自分」を見つけ、望みどおりの人生を送ることができるのだろうか？本書を通じて見えてくるのは、海外生活への期待と現実の溝に打ちひしがれ、曖昧な将来への不安を抱えながら「自分」に固執する若者たちの焦りと孤独感である。そんなかれらに向ける著者の視線は温かくも手厳しい。「自分探し」の旅にふらりと出かける前には是非読んでほしい一冊。

③―真珠湾攻撃に始まる日米開戦は、日本人の両親のもと、アメリカで生まれ育った日系アメリカ人二世の若者たちに苛酷な選択を突きつけた。「あなたが忠誠を誓うのは日本か？アメリカか？」日本人の血が流れている――ただそれだけの事実を根拠に、二世とその両親は、アメリカへの忠誠心を疑われ、鉄条網で囲まれた強制収容所に送られた。日本人に対する剥き出しの敵意と差別が蔓延するアメリカ社会の中で、二世の若者たちが選んだ生き方とは？ 圧倒的なリアリティを伴いながら、二つの祖国に切り裂かれる二世たちの心の機微を情感豊かに描きだしたこの歴史小説は、読む者をぐいぐい引き込み、涙を誘いながら、「国」とは何なのかを、あらためて私たちに考えさせる。二つの祖国を愛し、日米の架け橋になろうと尽力した

主人公が、原爆投下と東京裁判の果てに辿り着いた決断を、あなたはどのように考えるだろうか。

西岡久充

（経営メディア学科）

- ①『儲かるオフィス―社員が幸せに働ける「場」の創り方』紺野登（日経BP社）
- ②『Googleの正体』牧野武文（マイコミ新書）
- ③『六〇〇万人の女性に支持される「クックパッド」というビジネス』

上阪徹（角川SSC新書）

①―「儲かるオフィス」と聞いてどんなオフィスを想像しますか。あまりコストをかけずに必要最低限のものしか用意されていないオフィス、あるいは逆に都心にあって外観、内装ともにお洒落なオフィスなどがイメージされるかもしれません。以前は、工業化社会といわれ、オフィスは事務作業を行うところでしたので、でき

るだけコストをかけないような質素なつくりでした。しかし現在は知識経済社会といわれ、オフィスの機能が変化しています。従業員同士がコミュニケーションを行いながら知的触発を繰り返す場所に変わりつつあるのです。つまり「儲かるオフィス」とは、コミュニケーションの活性化や新しいアイデアの創出を行いながら、知識創造やイノベーションを起こすオフィスであるといえます。そのような「儲かるオフィス」のためのワークプレイスづくりについて事例を踏まえながら説明されています。

②―普段皆さんが何気にググっているグーグル。検索だけでなく、メールやグーグルマップ、ユーチューブ、さらにはワープロや表計算などほとんどすべてのサービスが無料で提供されています。今現在も新たなサービスを無料で提供しながら、グーグルという会社は年間二兆円以上を売り上げています。なぜグーグルは無料のサービスばかりを提供して収益を上げているのでしょうか。一般的にグーグルのビジネスは広告収入といわれていますが、実はその裏には緻密に考えられたビジネスモデルがある。そんなグーグルの正体についてわかりやすく紹介されています。

③―六百万人の女性に支持され、三十代女性の四人に一人が利用している「クックパッド」というサイト。料理レシピを掲載するサイトでは日本最大級で、レシピの検索だけでなく、ユーザ自身がレシピを投稿して公開することができます。料理が楽しくなることしかやらないという信念のもと、徹底したシステムづくりやきめ細やかなサービスを提供しています。いろいろな料理情報がある中でなぜ多くの女性が「クックパッド」を支持しているのか、どのようなサイトでどのようなビジネスモデルなのか、今まであまり知られていなかった「クックパッド」の秘密について知ることができるとともに、社長の信念や生き方についても参考になります。

永澤峻

(総合文化学科)

西洋の文化と美術を中心に講義をしていますので、この二つの分野の歴史(物語)に関して、読みやすく、面白いと感じた本をまず二冊挙げました。そして、三冊目に、絵画、写真などの幅広い視覚イメージを手がかりとして、歴史を読み解くため

の、優れた道案内の役割を果たしてくれる本を挙げてみました。

- ①『子どもたちに語るヨーロッパ史』ジャック・ル・ゴフ（ちくま学芸文庫）
- ②『美術の物語』E・H・ゴンブリッチ（ファイン）
- ③『時代の目撃者——資料としての視覚イメージを利用した歴史研究』

ピーター・バーク（中央公論美術出版）

①——私が老若男女を問わず、さまざまなたちに推薦している、薄くて読みやすく、密度の濃い内容を持つ文庫本です。とにかく手にとって、出だしの「徒歩でヨーロッパからアジアへ」の短い項目を読んでみてください。紙上で旅をしながら、ヨーロッパとアジアのヒトや、モノや、文化や、歴史を知ってゆくことの面白さが実感できるはずです。ル・ゴフは、文化人類学にも通じているヨーロッパ中世史の優れた研究家ですから、若い読み手に「ヨーロッパ人たちの犯した過去の過ちや罪を隠さず」明らかにしているだけでなく、（ヨーロッパが）「ヨーロッパばかりでなく世界にとっても素晴らしい成功をなしとげ、比類のない貢献をなしとげたこと」（『ル・

ゴフ自伝』）についても、実に堂々と公平に語っています。

②——他に類例を見ない、優れた美術史の入門書です。序章は「これこそが美術だ」というものが存在するわけではない。作る人たちが存在するだけだ。（中略）普遍的な「美術」が存在するわけではないのだ。ところが、いまや「美術」が怪物のようにならば、盲目的な崇拜の対象となっている」という衝撃的な言葉で始まりまします。今回推薦する翻訳は二〇〇八年に出た新訳本で、大学の図書・情報館に数冊入っています。外見だけを見ると、分厚く、手に取るのに気おくれするかもしれませんが、まずは最初の方を開いてみてください。僅か数行記述されているだけの二つの作品の場合でも、必ず見開き二ページにカラー図版で見比べられるようにレイアウトしてあります。わたしたちは、とかく美術作品について「見ればわかる」と言いがちですが、ゴンブリッチは、難しい問題も避けずに、やさしい言葉で、ある作品が別の作品と「どこが似ていて、どこが違っているか」を的確に語り、図版を見て考えることを教えてください。芸術学科の三上豊先生は和光大学在学中に、この本の旧訳を「推理小説のように一気に読めた」と言っておられますが、新訳は、こ

うした醍醐味をさらに生かすようにと、ゴンブリッチが晩年に加筆した第十六版に基づくもので、図版も大半が見事なカラー図版となっています。二〇世紀の偉大な写真家の一人アンリ・カルティエ・ブレッソンは、「こういう等式が成り立つ。知識＋目＝ゴンブリッチ」だと語っていますが、まさに本書の語り手ゴンブリッチの真髄を見事に言い当てていると思います。

③ ル・ゴフとゴンブリッチの二冊の著書を手にとって読み、柔軟な見方とやさしい語り口を通して、歴史、文化史、美術史に関心を持ち、イメージ資料と文字資料の関係を知りたいと思った場合の、わが国で現在入手し得る最良の入門書です。美術に関心を持つ人だけでなく、文学、社会学、経済学を学んでいる人が、いわゆるハイ・アートを含めて、報道写真や広告、マンガなどを、文字資料と同じように読み解いて利用したいと思う場合に、この本の序章を含む十一の章の記述と図版は、とても大きなヒントを与えてくれるはずです。もちろん、注意しなければいけないこともあります。それは、いわゆるイメージ資料と言われる作品の多くが多種多様な目的のために作られたものであって、「証拠となることを目的として作られたもの

ではなかった」ということです。ピーター・バークは、イメージ資料が、このような大きな制約のもとに置かれたものでありながら、思いもよらぬほど深い歴史的な真相に光を当ててくれることを、豊富な過去の例と新たな視点や方法論とともに示唆してくれています。

堂前雅史

(身体環境共生学科)

① 『環境を知るとはどういうことか——流域思考のすすめ』養老孟司、岸田二

(PHPサイエンス・ワールド新書)

② 『生物から見た世界』ユクスキュル、クリサート (岩波文庫)

③ 『莊子』莊子 (徳間文庫)

① 「地球環境を守る」なんて言われると、なんとなく偽善的に聞こえるのは、実感にないものを語っているからかも知れない。養老孟司が、「流域」を生態系の

単位と見て自然保護の実績を残した岸由二から、自分の足もとと地球との繋がりについて刺激的な話を聞き出していく。現代の環境思想論の成果が何気ない言葉で交わされている。和光大学の目の前を流れる鶴見川ではこんな凄いことがなされているのだと言うことを是非とも知って欲しい。

②—I我々が見ているものは、この世界のほんの一面に過ぎない。しかもどう見えるか、どういう意味があるのかは、生物によって異なる。人間は紫外線は見えないし超音波は聞こえないが、蝶には紫外線は見え、フクロウには超音波が聞こえる。椅子は人間にとっては座る物だが、イヌには小便をかける目印。彼らに世界はどう見えているのか。生物学の世界ではあたり前の事実を考え出すと、他の生命、他の人間と同じ世界にいるということが奇跡のように思えてくる。

③—I冒頭から、その背何千里もある鵬という大鳥や鯢という大魚、八千年を春として八千年を秋とする大椿（だいちん）という樹木が登場して、小学生の時、読んだ私はすっかり心酔した。自然は、世界は、我々人間の言葉や思考法では解しよう

がないものがあり、しかもそれが一番重要な部分だという。そんなことがめくるめく神仙や怪獣の説話の中で語られる。私自身、自然と自然科学の関係についての捉え方に影響を与えられた一冊。

常田秀子

（心理教育学科）

自分たちと同じような、違うような存在の心を考えるための三冊です。

①『ぼくらは海へ』 那須正幹

（文春文庫）

②『眼を見なさい！』—アスペルガーとともに生きる

ジョン・エルダー・ロビンソン（東京書籍）

③『なぜ女は昇進を拒むのか』—進化心理学が解く性差のパラドクス

スーザン・ピンカー（早川書房）

①―授業の中で、よく子どもたちの心をくつきりと描いた児童文学を紹介するのだが、これはその中の一冊。『ズッコケ三人組』という愉快な児童文学シリーズで有名な那須正幹さんによる、強烈な問題作だ。話は、海辺の工業地帯にある地方都市、荒涼とした浜辺の資材置き場の跡地に何となく集まる小学六年生の男子たち。成績や経済格差のある彼らが、自分たちだけの秘密基地でいかだ作りを始め、ついに海にこぎ出す。彼らの冒険は悲劇なのか、それとも希望なのか。複雑な後味を残す名作だ。

②―アスペルガー障害は生まれつきの社会性の障害で、二〇三％の人がこの障害を持っているという。本書は、四十歳で初めてアスペルガー障害と診断された筆者による自伝である。彼は幼児期から人付き合いに苦労し、高校をドロップアウトした後、ロックバンドKISSのメカニックとなり、リードギタリストのために火を噴くギターを開発する（このコンサートシーンの映像は、当時高校生だった私もテレビで見えてよく覚えている）。その職人芸的なこだわりは、コミュニケーションの困難と引き替えに彼が授かった力だと思わされる。アスペルガー障害の人にも、彼

らとともにある社会全体にも希望を与えてくれる一冊だ。

③―近年の脳研究や心理学は、男女の差異の生物学的な根拠を様々に明らかにしてきた。例えば、アスペルガー障害など発達障害の発症率は圧倒的に男性に多く、男性の方が極端な認知的傾向をとりやすいなどである。本書は共感性、コミュニケーション能力、論理的思考力などの観点から生物としての性差を明らかにする一方、それが社会的格差につながらないような社会の成熟を訴えている。中で紹介された極端な性向を持つ人々へのインタビューは、人間の多様性をしみじみ考えさせてくれて、とても興味深い。

千田誠一

（総合文化学科）

①『外国語学習に成功する人、しない人―第二言語習得論への招待』

白井恭弘（岩波科学ライブラリー）

②『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション——誤解・失敗・すれ違い』

久米昭元、長谷川典子（有斐閣）

③『世界の日本人ジョーク集』早坂隆（中公新書ラクレ）

①―第二言語習得研究の分野における研究結果に基づき、本当に有効な外国語学習法とはどんなものかについて論じた本。日本人がなぜ英語が下手なのかから話が始まり、動機づけや母語の影響などについて説明がなされている。また外国語学習に成功する人とならない人のちがいを論じ、最終的に有効な学習法について提案がなされている。大学生にとってはとてもわかりやすく、丁寧に書かれている魅力の本。

②―本書は異文化間で起きる摩擦を事例で紹介する。例えば、アメリカに留学した日本人女子学生がチームのディベートで発言しなかったところ、クラスからいじめを受けたなど。本書の特徴は、ケースを取り上げた後「設問」が用意されており、クラスでのグループワークなどで用いることができる。また「考察」や「課題」も設けられており、テーマを追求するのに適している。大学四年生にとっては卒業論

文の資料としても十分使用価値があるといえるお薦めの一冊。

③―日本人の国民性を笑いの対象にしたジョーク集。日本人の勤勉さや真面目さ、和を重視する性格を逆手にとってありとあらゆるジョークを集めている。日本人にとっても思わずクスッと笑ってしまうものも数多くあり、不快な感情を抱かせるものは少ない。同時に世界各国との文化の対比ができ、異文化についての勉強にもなる。ジョークの下手な日本人が読むのはうってつけのジョーク集と言える。

竹田泉

（経済学科）

①『河童が覗いたヨーロッパ』妹尾河童（講談社文庫）

②『日本』とは何か』網野善彦（講談社学術文庫）

③『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』川北稔（岩波現代文庫）

①―私が衝撃を受けた数少ない本の一つ。文字、イラストはすべて手書き。活字や写真では伝わらない、なんともいえない温かいものを感じとることが出来ます。普段は気にもとめないものが、こんなにも楽しくわくわくするものだったのか！車掌さんの国別比較や、ホテルの部屋の間取り図……まあ、手にとってください。『河童が覗いた……』シリーズは他にもいろいろ。インド、そして……えっ、トイレ!!

②―日本はいつから「日本」になったのか？日本人にとって本質的な問いであるにも関わらず、これまであまり語られなかった「日本とは何か」という問題に迫っています。その過程で、日本列島は海に囲まれた閉鎖的な島国という認識や、縄文時代は「遅れた」社会であったといったイメージは次々に覆されていく。わたしたちの「アイデンティティ」についても鋭く問いかけてくる、現代的な意義を持った壮大な歴史書。

③―世界史上、初めて工業化を成し遂げたイギリスを舞台に、同時代に生きた人々の視点から「帝国」の構造を描くとともに、どのような人々が新天地アメリカに渡っ

たのか、その過程にどんな社会問題が反映されたのかについて、歴史資料を用いて明らかにしていく。「帝国」、「民衆」、「移民」といったキーワードを軸に、当時の大英帝国の実像に迫ろうとする新しいタイプのイギリス史。

詫摩昭人

(芸術学科)

①『ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻』

フォルカー・ハーラン、ライナー・ラップマンほか (人智学出版社)

②『ヒトはなぜ絵を描くのか』中原佑介 (フィルムアート社)

③『ドゥルーズの思想』ジル・ドゥルーズ、クレール・パルネ (大修館書店)

①―生きていることが芸術である……。学生に、「芸術とは何？」と質問をする時折返ってくる言葉だが、それを真剣に実践した人がヨーゼフ・ボイスです。ハチャメチャでありながら愛すべき存在のボイス。誰もが芸術家であるという思想を

よく考えられる一冊です。

②―本書は、著者が十人の様々な専門分野の人に対して「我々はなぜ絵を描くのでしょうか」と問うたものです。チンパンジーは絵を描くのに、ニホンザルは絵を描かない。どうしてでしょうか？とても分かりやすく書いてあり、初心者でも理解できそうです。

③―ドゥルーズの書物はどれも興味深く読むことができるが、その中でも入門的に読めるのがこれであろう。「お説ごもっとも、では別の話題に……」、「現実の最小単位は、組み合わせである……」など、魅力的な言葉がちりばめられています。

高橋 巖 (総合文化学科)

①『宇宙を復号 (デコード) する ―量子情報理論が解説する、宇宙という驚くべき暗号』

チャールズ・サイフエ (早川書房)

②『脳は眠らない ―夢を生み出す脳のしくみ』アンドレア・ロック (ランダムハウス講談社)

③『I・N・R・I・』セルジュ・ブラムリー、ベッティナ・ランス (新潮社)

①―宇宙の全ては情報である、という簡潔な結論にどのような経緯で辿り着いたのかを、暗号から始まり永久機関、DNA、量子コンピュータなど色々な事例を取り上げながら説明していく本書は、情報という概念を拡張し、意識に新たな窓を開ける手助けをしてくれる。慣れないと難しく感じるかもしれないが、暫く我慢すれば間もなく面白さに夢中になるはずだ。全ての情報が無に帰す宇宙の終焉を、情報理論によって証明するという皮肉も興味深い。

②―脳についての様々な書物が書店に並ぶという、十年前では考えられないブームの中にあって、判りやすく且つ知的好奇心を刺激する本はそう多くない。本書は、脳科学者が睡眠中に見る夢の正体を突き止めてゆく過程を、丁寧な取材と飽きさせない構成で紹介している。中でも、脳にとっては夢も現実も等価であるとする研究

成果は、莊子が『胡蝶の夢』で投げかけた疑問への回答とも言える。夢の中で夢をコントロールする明晰夢の記述も興味深い。

③「タイトルの『I・N・R・I・』は、ラテン語で「ユダヤ人の王ナザレのイエス」という意味。一言で言えばイエスの生涯を描いた写真集なのだが、ファッション誌のようなビジュアルで描写し直された、自由奔放なイメージで構成されている。決して奇をてらっているわけではないことは、扱っているテーマを考えれば明らかだろう。それにしても、『ライオン・キング』のジュリー・テイモアしかり、女性アーティストの大胆で挑戦的な発想には魅了される。

佐治俊彦

(総合文化学科)

①『丸山昇遺文集』全三巻 丸山昇 (汲古書院)

②『拝金社会主義中国』遠藤誉 (ちくま新書)

③『上海時空往来』莊魯迅 (平凡社)

①——この本は、戦後日本における中国現代文学研究の代表者の一人で、創立当初五年間和光大学人文学部の助教授を務められた丸山昇氏が、数々の単行本以外に雑誌や新聞に発表した文章の編年体による集成である。氏は二〇〇五年七十五才で逝去され、まっ夫人が編集・発行されたものだが、その夫人も第三巻の刊行を待たず、去年逝去された。学生には最初取つきにくいかも知れないが、学生運動時代、メーデー事件の被告時代から始めて、ライフワークの魯迅研究、反右派「闘争」や文化大革命時期の中国知識人の研究、亡くなる最晩年の仕事まで縦覧でき、中国の社会がどう変化してきたか、日本の知識人が戦後中国の文化界といかに真剣につき合ってきたかが手に取るように分かる、血の通った手引き書の役割を果たしてくれる。

②——著者は一九四一年中国長春生まれ。五三年帰国するが国民党と共産党の狭間の卡子(チャープ)とよばれた「収容所」から奇跡の生還を遂げた人。その体験を綴った『卡子——出口なき大地』で有名となった。本書は、現在の中国が直面している

様々な問題、マイホーム熱狂・結婚できないデキル女・農村の嫁日照り・大学生の就職難・農民工問題・特権と格差などの状況に対して鄧小平の「先富論」から暴走し始めた「向銭看」＝銭力（ぜにりょく）の視点から容赦ない分析を進める。使われる資料はネット情報が中心で、怪しい情報もあるかもしれないが、それだけに中国民衆の生の声を確かに伝えている。日本人との発想の違い、中国急膨張の原因などを知るには絶好の書であり、中国との距離がぐっと縮まるだろう。

③―著者はご存知、本学非常勤講師。文化大革命後中国最初のシンガーソングライターとして中国全土で音楽活動を展開したが、一九八八年来日、その後音楽活動のかたわら大学やカルチャーセンターで漢詩、音楽、中国史などを講ずる八面六臂の活躍をしている。世界中の都市で、上海ほど語られ、語り続けられている都市はないだろう。近代史における日本との関係の深さが一つの原因だが、世界中の人々を惹きつけ続けている上海の魅力が、まだまだ語り尽くせないからであろう。それから万巻の書を読んでもどこか所詮よそ者の上海論という印象は拭えないが、本書は根っからの上海人の上海論、上海の歴史、食、人……その魅力、上海に対する著者

の愛憎までが思う存分堪能できる。

今野弘章

（総合文化学科）

- ①『ことばの宇宙への旅立ち——10代からの言語学』全三巻 大津由紀雄（ひつじ書房）
- ②『言語のレシピ——多様性にひそむ普遍性をもとめて』マーク・C・ペイカー（岩波現代文庫）
- ③『やわらかな心をもつ——ぼくたちふたりの運・鈍・根』小沢征爾、広中平祐（新潮文庫）

①―時折「先生はどうして言語学者になったんですか？」と訊かれることがある。質問した学生は、個人の動機や過程を尋ねているのだから、それについて話す。だが、話していて「申し訳ない」と常々思う。それは私が言語学者を目指した動機が「あこがれた先生が言語学者だった」というもので、言語に対する純粹な興味ではなかったからだ（大学院時代に大変遅ればせながら、言語に対する本当の知的好奇心が芽生えましたと言いついておきます）。本シリーズでは十六名の著名な

言語学者が個人史と研究の魅力を楽しく語っている。冒頭の質問の答えを私が考えている間に、先にこの三冊を読んでしまおうというのはどうだろうか。

②―世界に六千余り存在するとされる言語。それらの言語では、文の主語・動詞・目的語がどのような順で現れるのかなど、文法が色々と異なる。この文法の多様性が、言語獲得に関して人類が共通して備えている有限個の「スイッチ」のON/OFFの切り替えの組み合わせによってもたらされるとしたら……。本書で展開されるのは、複雑怪奇に映る様々な現象が、実は共通の簡潔な仕組みから成り立っているという考え。あなたはそれを「美しい」と感じますか？

③―世界的な「指揮者」と「数学者」の二人による対談集。対談をそのまま会話で収録しており、大変読みやすい。二人の対談者は、生活、仕事、教育、家族等、どんな事柄についても、自らの経験に基づいた哲学・信念を持って語る。本書の内容を自分に引きつけて解釈すれば、読み手はきっと多くのことを感じるはず（実際私がそうだった）。タイトルにある「やわらか」という表現はどのような意味で用

いられているのか、読後に考えてみるのも面白い。

小林芳文

（身体環境共生学科）

- ①『リハビリの夜』熊谷晋一郎（医学書院）
- ②『足でつかむ夢―手のない僕が教師になるまで』小島裕治（ブックマン社）
- ③『体の贈り物』レベッカ・ブラウン（新潮文庫）

①―本書は、自らが重度の脳性まひによる歩行困難という運動障害を持つ当事者のリハビリテーション訓練に対する疑問を投げかけた専門書である。著者は、現在東京大学で研究者として活躍している青年医師である。乳幼児期から十八歳まで毎日学校でリハビリを受けて来たことが、自分の運動障害という弱点を目立たせることに繋がり、敗北と悲しい思いを加速させたという。リハビリの訓練は、「健常者の動き」をシミュレートする内部モデルを起動するように指示されて、その都度体

をこわばらせて苦痛の連続で有ったという。もっと体の遊びを取り入れていくこと、体の動きには「あそび」があるから、いろいろな運動ができるのだ。この本でのメッセージは、今後特別支援学校の肢体不自由児の動作訓練のあり方をも揺り動かす大きな提言となることは間違いない。私の専門は、ムーブメント教育・療法という運動遊びの要素を取り入れた障害児運動支援法である。長年私たちがアピールしてきた障害児に訓練は必要ないことを裏付ける、医学者からの貴重な書である。

②—この本は、障害を乗り越えて強く生きていく一人の若者の「生きる」とはどういうことか」を教えてくれる、現代の学生に読んでいただきたい感動の書である。水泳、マラソン、足でマイクを持ったり、書道に励んだり、留学をしたり、外国に旅に出たりと全てに挑戦する著者の生き方に、まず大きなエールを送ることにしよう。彼は四歳の時に交通事故で両手、両腕を失った。幼稚園で入園を断られてから、学校、地域などで沢山の差別を受け大学を卒業したが、就職も失敗、アルバイトをしながらついに三度目の正直であこがれの教師になった。この著者の生き方は、失敗しても「Let it be (なんとかなるさ)」の気持ちでいくこと、全てにプラス思考

の生き方こそいつか大きな太陽が応援してくれるという僕の考えと一致する点である。「ゆっくり、そして楽しく」を忘れずに。

③—この本の内容は、エイズ患者を世話するホームケア・ワーカーを語り手とし、彼女と患者たちとの交流を巡る、生と死の、喜びと悲しみの、希望と絶望の物語である。死んでいくエイズ患者たちとのやりとりを体の贈り物として、汗、充足、涙、肌飢え、動き、死、言葉、姿、希望、悼みという側面を取り上げている。著者のレベッカ・ブラウンは、日本であり知られていないが、この本でラムダ文学賞、ポストン書評家賞を受賞している。彼の別な作品『若かった日々』も必読の書である。

高坂康雅

(心理教育学科)

- ①『はじめて学ぶパーソナリティ心理学——個性をめぐる冒険』小塩真司 (ミネルヴァ書房)
②『大学生の自己分析——いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために』

宮下一博、杉村和美 (ナカニシヤ出版)

- ③『桐島、部活やめるってよ』朝井リョウ (集英社)

①「血液型と性格は関係があるのか?」「IQは高い方がよいのか?」「そもそも性格とは何なのか?」。私たちの普段の会話によく表れる性格(パーソナリティ)に関する言説について、心理学の歴史と最新の研究を併せて説明するパーソナリティ心理学の入門書であり、心理学の知識がない人でも簡単に読め、理解できるように書かれています。この本を読めば、もう「あの人は○○な性格だから……」「私、□□型だから……」なんてことは軽々に言えなくなります。

②「この本には、“いまだ見えぬアイデンティティに「突然」気づくために”(カギカッコは紹介者)という副題がつけられています。第一章から第四章まではエリックソンのアイデンティティ理論や現代の大学生論を中心に書かれ、第五章では実際に色々な形態の自己分析を行います。そして第六章では、自己分析の結果見えてくる“豊かなアイデンティティの世界”が書かれています。この本を読み、実際に自己分析を試みてみてください。その結果、突然アイデンティティに気づき、“豊かなアイデンティティの世界”に進めるかどうか……今のあなたが試されます。

③「舞台は田舎の県立高校。男子バレー部の頼れるキャプテン桐島が突然バレー部をやめた。どの高校にもありそうな小さな出来事がこの小説のスタートになる。ただし、当の桐島の物語ではない。何より、この小説には桐島が出てこない。桐島と同じ高校に通う五人の高校生を主人公にした五つのショートストーリー。それぞれが桐島が部活をやめたことによって、ちょっとずつ何かが変わり、動き出す。その背後に見え隠れする桐島と、重なり合う五人の主人公。読み終わった後、爽やかで懐かしい感覚を味わうとともに、“人との関わり”について考えさせられる一冊。

木村重樹 (総合文化学科)

「(和光生に読んでもらいたい) 専門の本＋ノンジャンルで三冊」という決まりなのだが、編集論(なるもの)の講師である自分の「専門の本」とは?しばし黙考の末、授業「雑誌メディア研究」の参考書に挙げたことのある二冊と、自分が大学生だった頃の愛読書を一冊紹介することにした(いずれも大学図書館に蔵書アリ)。

①『雑誌のカタチ——編集者とデザイナーがつくった夢』山崎浩一 (工作舎)

②『日本ロック雑誌クロニクル』篠原章 (太田出版)

③『音を視る、時を聴く』哲学講義』大森荘蔵、坂本龍一 (ちくま学芸文庫)

①——いまどきの学生さんが物心ついた頃には、雑誌はすでに「各々の趣味関心やスタイルを追認するツール」として、ほぼ“できあがって”しまった感が強いのだが、かつての名物雑誌とは(やや大げさな言い方をすれば)時代精神をリードし、その

作り手と読み手が独特の共同体意識を形成し得た「器(うつわ)」であり「広場」であった。それはなぜか?本書は『少年マガジン』、『POPEYE』、『ワンダーランド』、『ぴあ』など、戦後日本の伝説的雑誌を産み落とした編集者とデザイナーの創意工夫の足跡をたどることで、単なる懐古趣味にとどまらず、それらに潜在するパワーに目を向けている。

②——「僕たちにとって、ロックは聴きながら“読む”ものだった」。ロックという舶来文化が海を渡って日本に上陸し、その裾野を広げてゆく過程で、音楽雑誌が果たした役割とその影響力の絶大さを、『ミュージックライフ』、『ニューミュージックマガジン』、『ロックキングオン』、『宝島』といった人気雑誌の誕生と変遷から検証した一冊。六〇〜八〇年代の……つまり皆さんが生まれる以前の話がメインだが、当時の若者にとってのロックが、先行世代にとっての「政治」や「文学」を代替するものであったことが浮き彫りにされていくのだが、スリリング。

③——「私とは何か?」「目の前のこの世界は、幻ではないのか?」日々の生活に

追われるオトナからしてみれば、なんとも青臭い悩みだと一蹴されかねない設問にある道筋を示してくれるのが、哲学。八〇年代初頭、カルチャー・アイコンとして大活躍中の坂本龍一が、日本屈指の科学哲学者・大森荘蔵に指南を受ける、といった趣向のレクチャー本（『爆問学問』の昭和版、というアレか？）。難解な学術用語を極力排して、平易な日常語でもって「時間」「イメージ」「私」「知覚」といった抽象概念を解き明かしてゆくのだが、これがSF小説のように面白く読めてしまう。ミュージシャン志願のキミにも、ぜひ！

笠井則幸

（芸術学科）

- ①『知識デザイン企業』紺野登（日本経済新聞出版社）
- ②『白』原研哉（中央公論新社）
- ③『天国までの百マイル』浅田次郎（朝日文庫）

①——経済が疲弊するとデザイン界に打撃を与える。デザイナー人口は減り、面白い商品や広告が減り、また経済状況が悪化するという昨今の悪循環。それと反比例するように成長する企業がある。アップル社の「pod」などを例にとってデザインとは何か？改めて考える。現在の企業が単にこの経営困難の時期にリストラや経営縮小だけで乗り切るのではなくデザインという知識を持って、アートカンパニーとして踏み出すと「新たに企業再建が開けるのではないか」と考えさせられる一冊。

②——グラフィックデザイナーとして活躍している著者が「白」について考察する一冊。グラフィックデザイナーにとってレイアウトの余白は、単なる紙面の余りではなくデザインされた空間である。著者は、「白」の色彩としての立ち位置を改めて考え、書、活字、水墨画などを通し、日本の「白」に対する美意識を確認している。さらに「エンプティネス」という概念で広く捉え、日本の宗教観、茶の湯、和室、国旗などを例にとって、この「エンプティネス」があらゆる日本の美意識に繋がることを、静かな口調で語っている。

③—もし家族がみんな元気に日々過ごしていたら、「自分の親が死んだら。」と考
えることは減多にない。ただ人間には「死」が訪れるという、避けては通れない現
実がある。もし親が死に直面していたら、自分はどう行動するだろうか？主人公
の中年男は男女愛、社会などに採まれながらも、病院から見放された母親をどう救
おうかと必死に駆け回っている。主人公の泥臭い表現が、切なく人間味あふれ、涙
を誘う。

奥須磨子 (経済学科)

①『日本資本主義と地域産業』佐藤弘 (時潮社)

②『前田正名』祖田修 (吉川弘文館)

③『害虫の誕生——虫からみた日本史』瀬戸口明久 (ちくま新書)

①—私たちは何のために歴史を学ぶのか。「住民にとっては地域こそが問題とな

るのであり、自分たちの地域がどのように形成されてきたのかという問題意識こそ
が歴史研究の出発点となるのである」と言い切った著者の態度に惹かれた。著者に
とって「自分たちの地域」とは山梨県、その産業の展開過程が対象である。しか
し、山梨県でなくても、近代、人々が何を生業とし、それにどのように取り組んで
きたのか、自分の地域で調べてみたいけれど史料がないと思っている人に薦めたい。
どの都道府県を対象にする場合でも基本的かつ入手可能な史料によく目配りされ
ており、参考になる。

②—高校までの教科書に取り上げられることはほとんどないが、大学で日本近代
の経済史を学ぶなら、必ず着目したい人物の評伝。前田は、外来大工業中心の殖産
興業期、中央官僚でありながら在来地方産業の優先の近代化を主張し、それが政府
主流によって否定されて官を辞した後は全国を行脚、その実践運動で生涯を送った。
主流となった政策だけで経済の近代化が達成されたわけではない。疲弊した地方の
活性化が課題の今、彼の思想と実践の重みが改めて胸に迫ってくる。

③―三冊目も副題に「日本史」がつく本になってしまった。ただし、これは「環境史」という新しい学問分野からの本で、近代における虫と人間との関係の変化を追ったものである。ゴキブリは叩き潰して当たり前と済ませてしまっている私たちをドキッとさせる、挑戦的な一冊である。また、新しい学問分野も様々な研究蓄積とその吟味があってこそ拓かれて行くのだなあと、感じさせられた。

遠藤朋之

(総合文化学科)

①『現代芸術のエポック・エロイク―パリのガートルード・スタイン』金関寿夫 青土社

②『パウンド詩集』パウンド 思潮社

③『新解さんの謎』赤瀬川原平 (文春文庫)

①―アーネスト・ヘミングウェイをはじめとする作家たちに「ロスト・ジェネレーション」という呼び名を付けたアメリカの女性詩人、ガートルード・スタイン。ス

タイン自身、拔群におもしろい詩を書いたが、スタインの詩のおもしろさもわかるし、スタインの一生をたどりながら、二〇世紀のアーティストたち、セザンヌ、ピカソからパウンド、エリオット、ジョイス、サティ、コクトーなどまで登場する「スタイン曼荼羅」。楽しんで読んでいたら、実は「モダン・アート」がわかってしまうというお得な本。必読。

②―二〇世紀の詩の基礎を作り上げ、二一世紀の詩にまで影響を及ぼす、二〇世紀の最大な詩人の詩集。『論語』の「学びて時にこれを習う」は、パウンドの手にかかると「過ぎゆく『時』の白い羽とともに学ぶのはよろこばしいことではないか」となる。「えっ、なんで!」と思ったら、本書を手にとってみよう。でも、「過ぎゆく時」が「白い羽」で羽ばたき過ぎ去っていく、非常に美しいメタファーだ。でも「白い羽」はどこから来たんだ? 答えはすでに書かれていますよ。

③―かなり昔のベストセラーだが、「ことば」と「モノ」の結びつきを考えるには、格好の入門書。「新解さん」とは、『新明解国語辞典』のこと。辞典の定義など、無

味乾燥なもの、と決めつけてない？ だったら、この本。例。「ごきぶり」。「台所を初め、住宅のあらゆる部分に住む、油色の平たい害虫。さわると臭い」。新解さん、さわったんだ……。これを楽しめた人は、『こいつらが日本語をダメにした』（ちくま文庫）に進もう。「小耳にはさむ」の「小耳」ってどこ？。「ことばの自律性」、つまり「ことば」と「その指し示すモノ」には何の関係性もない、ということが、大笑いしながらわかってくる。この先には、丸山圭三郎の言語哲学が遠くに見えていることも書いておこう。

上野俊哉

（総合文化学科）

ちょうど学生さんたちと同じくらいの年齢のときに読み、今でもときおり読みかえす本を三冊あげる。文庫本でコンパクトなので、旅をするときスツケースに放り込んでおくことの多い数冊だ。三冊とも、もう地球を何周しているかわからないほど。どの本も、これ読んでつまらなかったら、そもそも読書や研究は向いていな

いのかも。

- ①『百億の昼と千億の夜』光瀬龍（ハヤカワ文庫）
- ②『泥棒日記』ジャン・ジュネ（新潮文庫）
- ③『気流の鳴る音』真木悠介（ちくま学芸文庫）

①―萩尾望都のマンガ版でも有名だけど、まずは原作を「掘って」みよう。阿修羅王（あしゅらおう、仏典にでてくる魔物で本作では少女の姿をしている）、シッタータ（仏陀）、プラトン（おりおなえ、アトランティス人の末裔）などのキャラクターがサイボーグになって登場。向かう敵はナザレのイエスことキリスト、その正体は「惑星開発委員会」のエージェント。舞台ははるか二千年以上の歴史を越え、五十六億七千万年の時間におよぶ。空間的にも銀河系を越え、無数の惑星の文明の滅びのかたちを主題にする。映画『マトリックス』よりはるかに先駆けて、人間が身体を捨てて仮想空間に生きるプロットも描かれる。文明や国家の滅亡そのものが、あらかじめ仕組まれた計画、プログラムだとしたら？ この本を読まなかったら、哲

学にも思想にも手を出さなかっただろう。

②―泥棒にして男色／男娼の作家が自らの若き日を自伝的な語りにおさめた小説。汚濁と聖性、放蕩と努力、裏切りと純粹な誠意が、その万華鏡のような文体のなかでいくたびも交錯する。何が善（良いこと）で、何が悪（わるいこと）なのか、根本的には誰にもわからない、という大人が教えたがらないリアルを伝えてくれる。ものを盗むということと、誰かの言葉を引用すること、何かしら音や画像を組み合わせることはどこか似ている。誰もが若い日々を経験するはずの「盗み」と「裏切り」から目をそむけることなく生きる不良（ワル）の高貴さをもつことができるかどうか？この本を楽しめるかどうかで自分の資質に向き合える。

③―ふとこの日常生活に飽きてしまっただけで旅をしたくなったとき読むといい。実際の旅に持っていくのも他の本と同様に使い度がある。著者は社会学者だったけれど、この本の射程は社会学の縄張りをあっさり越えている。メキシコのネイティブのシャーマンに教えを乞う若き人類学者の青春の本でもあったカスターネダの『ドン

ファン』シリーズを下敷きに、日本の「世間」や社会の息苦しさ、「資本主義」というシステムのなかでどのように「異なるものになる（あるいはシステムを異化する）」か、そんな生きる身ぶりを教えてくれる本でもある。話題は自然や生き物との共生、宗教や神話の世界と社会学、幻覚物質と心の深層にいたるまで、とても幅広い。

岩本陽児

（心理教育学科）

①『風雲将棋谷』角田喜久雄（春陽文庫）

②『グイン・サーガ』全一三〇巻 栗本薫（ハヤカワ文庫）

③『60歳から少しでも社会貢献を始める本』佐藤葉、清水まさみ（実務教育出版）

①―十九歳のお絹は、秘術「紫雲流さみだれ縄」の使い手だ。彼女の危機を救った正義の怪盗、雨太郎。もちろん二人は美男美女である。お互い惹かれあいなが

ら、対決する宿命の二人。彼らは、神通力でサソリをあやつる謎の殺人鬼「黄虫阿（こうちゅうか）」の恐ろしい陰謀に巻き込まれてゆく。昔の青少年はさぞ興奮したのだろうなあ。ワンパターンだらけの本書は、二一世紀の今となってはあまりに新鮮で、まるで何かのパロディのよう。それくらい古典的なのである。もろ。最終章。急転直下の意外な幕切れが、あなたを待っている。すごいぞ。

②—七〇年代から延々と発表されてきた超大作。ずっと各巻三百ページ超だったのが、〇九年末に刊行の第一三〇巻だけ厚みが半分で、未完。見るだに切ない。この十数年、最新刊を一気に読み終えて、数か月先の日本からの書籍便を心待ちにしたあの期待感も、「もういくつ寝るとお正月」ではないが、あと何巻で完結の百巻目になるという高揚感も、この予告が撤回された時の、落胆と安堵がない交ぜになった気持ちも、もう味わえない。著者のご冥福をお祈りする。

③—「二〇〇七年問題」は、社会教育・生涯学習の分野では、団塊世代の大量退職問題。もっぱら会社人間だった人が、地域の生活者としていかに転身を遂げられ

るのか。本書には、「地域社会」メンバーとして仲間とともに充実した人生を送っているシニア男性たちが実名で登場する。人間の成長・発達に年は関係なく、幸せづくりの秘訣は人間関係にありということが分かって励まされる。ところで、本書に登場するのはもっぱら男性だが、あと二十年もしたら、「均等法」で総合職を歩んだ独身女性たちの定年と地域デビューの物語が紹介される時代が来る、かな？

岩間剛一

（経済学科）

①『もういちど読む山川日本史』五味文彦、鳥海靖（山川出版社）

②『もういちど読む山川世界史』『世界の歴史』編集委員会（山川出版社）

③『グリーン資本主義—グローバル「危機」克服の条件』佐和隆光（岩波新書）

①②—大学に入学してきている学生の多くは、中学校、高等学校で歴史の勉強をしている。何をいまさら日本史や世界史の勉強を苦勞してするのだと考えるのも当

然かと思われる。しかし、自分が今生きている社会とは、どうして成り立っているのか、自分の生活はどのような背景で形作られているのか、疑問を持つことも多い。そうした時に、二十歳の大人となり、様々な社会経験を積んだうえで、改めて日本および世界の歴史を学びなおすことは、これからの長い人生を生き抜いていくうえで、大きな智恵となることと思う。本書は、そうした大人が楽しむ、知的冒険としての内容が溢れている。

③―地球温暖化問題をはじめとした地球環境問題の解決は、人口爆発を続ける人類にとって最重要の課題である。だが、炭酸ガスを排出しない社会（低炭素社会）、大気汚染物を出さない工場を構築するためには相当のコストがかかる。今でも、環境意識の高いといわれている米国においても、産業界に大きな負担をかける地球環境保護に消極的な意見は根強い。それに対して、筆者は環境と経済成長は決して対立するものではなく、地球環境保護への再生可能エネルギーの開発等が、新たな経済成長をもたらすという重要な問題提起をしている。地球環境を守りながら、私たちの豊かな生活を持続するという大きな課題に、強い興味のある学生に一読をすすめる。

うつたけひん

（伊藤武彦・心理教育学科）

①『安心して絶望できる人生』向谷地生良、浦河べてるの家（生活人新書）

②『暴力についてのセビリア声明―戦争は人間の本能か』

デービッド・アダムズ（平和文化）

③『坊っちゃん』夏目漱石（角川文庫）・『うつらなり』小林信彦（文春文庫）

①―ソーシャルワーカーである向谷地氏は北海道の襟裳岬の手前にある浦河町で「べてるの家」という精神障害者の自助組織・会社・共同体をつくります。浦河では毎年六月下旬に「当事者研究大会」と「べてる祭り」があり、二〇〇八年から毎年、「実践研究a1」の授業としてフィールドワークを行っています。本書は当事者研究について紹介しています。研究という切り口で、楽しく仲間と問題を分析し、

具体的・建設的・創造的に解決法を探っています。精神障害に限らず広く人間関係の問題にも示唆を与えます。

② 一九九六年に「セベリア声明」は、戦争は人間性に内在するのであるから無くすることはできない、という悲観的な考えに対して、その誤りを明らかにしています。戦争は人間性と切り離せない、脳には暴力中枢がある、人間には戦争本能がある、などと思っている人に読んでもらいたいと思います。攻撃と暴力は良く混同されますが、その違いについて考えてみましょう。この声明は、ユネスコや各国の諸学会、日本では応用心理学会と心理科学研究会が支持・普及しています。

③ ーあまりにも有名な夏目漱石の短編小説『坊っちゃん』は、流れるような文体と痛快なストーリー展開が読者に元気を与えます。この小説で主人公を「坊っちゃん」と呼んだのは清と吉川先生（って誰？）でした。小林の小説『うらなり』は、影の薄い登場人物であった古賀先生が主人公となり、堀田先生（って誰？）に回想を語る形式を取る小説で、夏目小説の主人公は、ここでは「五分刈り」とアダ名さ

れています。田舎の旧制中学校に起こった同じ事件を異なった視点で切取るとどうなるか？黒澤映画『羅生門』を見る思いです。

伊藤隆治（経済学科）

① 『子どもの絵はなぜ面白いか——お母さんが子どもを理解するために』 安斎千鶴子（講談社）

② 『柴田和子正々堂々のセールス』 柴田和子（東洋経済新報社）

③ 『これ、誰がデザインしたの？』 渡部千春（美術出版社）

① ー子供は「無心」に絵を書きます。そう「無心」という言葉。大人になると「無心」に取り組む行為が薄れてしまします。これは共通して「想像」そして「創造」も薄れてしまっています。子供の描く絵には私たち大人の忘れてしまった「取り組み」の重要なヒントが隠されています。単なるなぐり描きではなく、「創造」を「想像」してみませんか？

②―良い仕事は人との信頼関係から出会えます。信頼関係は良いコミュニケーションから生まれます。コミュニケーションは自分自身の心の幅を広げます。どんな小さな事でも人の為に尽くし、社会に奉仕する心を持つことが重要です。生命保険トップセールスでギネスブック認定、三十年連続日本一の記録を持つセールスレディ柴田和子さんのゼロからのスタートを書き記した一冊です。

③―我々の生活の中にごく普通にある身近な生活用品。もちろんデザイナーがデザインしています。デザインは無意味に色づけ、形状が作られている訳ではありません。身近な商品がどのようなコンセプトでデザインされているか？身近なものだけにその意味を知ってみるのも面白いですよ。

浅見克彦

(総合文化学科)

①『デカルト著作集』第二巻・第四巻 デカルト (白水社)

②『人間機械論』ド・ラ・メトリ (岩波文庫)

③ 雑誌『夜想』第十七号「特集 未来のイウ」(ペヨトル工房)

学生がアニメ『イノセンス』について語るのを聞いて、がっかりすることがある。たとえば、『デカルトが人間は機械だと言っているように、人間は機械仕掛けの人形じゃないかってことですよ。』まったく??である。

デカルトは、身体を機械的メカニズムだとは言ったけど、精神は全く別だと言っています。心身二元論なのですから。『攻殻』好きのみなさん。デカルトを語るなら、まずは『省察』(著作集第二巻)や『人間論』(著作集第四巻)を読んでください。

他にも、『ラ・メトリの『人間機械論』(岩波文庫)が重要です。』なんていう危ない「常識」が開陳される。確かに彼は、精神作用も含めて人間はある意味で機械だと言ってますから、デカルトよりは『イノセンス』に近い人でしょう。でも学生に、君は人間精神が自動的なメカニズムだと思うの、と聞くと「ちょっと違いますよね」。だったらなんで人間機械論がどうのと騒ぐわけ？

他人が口にするキャッチーな言葉を集めるだけでは、いかなる思考も生まれませ

ん。話題にされている人について語りたいのなら、まずはその著作を読むこと。これ、批評の大原則です。でなければ、まがいものの「議論」と本物の「議論」を見分けられない。この点では、まずは『夜想』第十七号の「特集未来のイヴ」にあたるといい。実は、この特集の書き物には、『イノセンス』の元ネタも結構あるのですよ。これ、内緒の話。ウェブに書かないでね。

「本を読もう」ブックリスト

85『眼を見なさい！——アスペルガーとともに生きる』

ジョン・エルダー・ロビンソン

東京書籍 2009年 1,680円

86『メキシコの青い空——実況席のサッカー20年』 山本浩

新潮社 2007年 1,680円

87『もういちど読む山川世界史』 「世界の歴史」編集委員会

山川出版社 2009年 1,575円

88『もういちど読む山川日本史』 五味文彦、島海靖

山川出版社 2009年 1,575円

89『儲かるオフィス——社員が幸せに働ける「場」の創り方』 紺野登

日経BP社 2008年 1,995円

90『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』

を読んだら』 岩崎夏海

ダイヤモンド社 2009年 1,680円

や行

91『夜想』第17号 特集 未来のイヴ

ベヨトル工房 1985年 1,500円

92『やわらかな心をもつ——ぼくたちふたりの運・鈍・根』

小沢征爾、広中平祐

新潮社《文庫》1984年 539円

93『ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻』

フォルカー・ハーラン、ライナー・ラップマンほか

人智学出版社 1986年 2,940円

94『「夜ふかし」の脳科学——子どもの心と体を壊すもの』 神山潤

中央公論新社《新書》2005年 798円

ら行

95『リハビリの夜』 熊谷晋一郎

医学書院 2009年 2,100円

96『60歳から少しでも社会貢献を始める本』 佐藤葉、清水まさみ

実務教育出版 2009年 1,575円

97『六〇〇万人の女性に支持される「クックパッド」というビジネス』

上阪徹

角川SSコミュニケーションズ《新書》2009年 798円

わ行

98『私のギリシャ神話』 阿刀田高

集英社《文庫》2002年 899円

99『私のように黒い夜』 J・H・グリフィン

ブルース・インターアクションズ 2006年 2,310円

- このリストは『本を読もう！』（第三集）の本文で紹介されている本を、五十音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版社、出版年、価格の順で記してあります。
- 作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもあります。比較的低価格のものを優先して掲載しています。
- 価格は税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@〇円～□円」は各巻の価格帯を表します。
- 原則として図書・情報館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書・情報館カウンターでご相談ください。

61『日本資本主義と地域産業』 佐藤弘

時潮社 2009年 3,360円

62『「日本」とは何か』 網野善彦

講談社《文庫》2008年 1,207円

63『日本ロック雑誌クロニクル』 篠原章

太田出版 2005年 2,079円

64『人間機械論』 ド・ラ・メトリ

岩波書店《文庫》1957年 210円

65『脳は眠らない——夢を生みだす脳のしくみ』 アンドレア・ロック

ランダムハウス講談社 2009年 1,680円

は行

66『拝金社会主義中国』 遠藤誉

筑摩書房《新書》2010年 798円

67『パウンド詩集』 パウンド

思潮社 1998年 1,223円

68『はじめて学ぶパーソナリティ心理学——個性をめぐる冒険』

小塩真司

ミネルヴァ書房 2010年 2,625円

69『彼岸過迄』 夏目漱石

新潮社《文庫》2010年 539円

70『美術の物語』 E・H・ゴンブリッチ

ファイドン 2007年 7,329円

71『必死の力・必死の心——21世紀を生きる全ての人たちへ』

黒崎健時

日本スポーツ出版社 2001年 999円

72『ヒトはなぜ絵を描くのか』 中原佑介

フィルムアート社 2001年 2,520円

73『百億の昼と千億の夜』 光瀬龍

早川書房《文庫》2010年 882円

74『風雲将棋谷』 角田喜久雄

春陽堂《文庫》1994年 570円

75『二つの祖国』全4巻 山崎豊子

新潮社《文庫》2009年 @660～780円

76『暴力についてのセビリア声明——戦争は人間の本能か』

デービッド・アダムズ

平和文化 1996年 735円

77『ぼくらは海へ』 那須正幹

文藝春秋《文庫》2010年 619円

78『坊っちゃん』 夏目漱石

角川書店《文庫》2004年 300円

ま行

79『前田正名』 祖田修

吉川弘文館 1987年 2,152円

80『魔獣の鋼鉄黙示録——ヘビメタル全史』 イアン・クライスト

早川書房 2008年 3,360円

81『マネジメント——基本と原則』 P・F・ドラッカー

ダイヤモンド社 2001年 2,100円

82『丸山昇遺文集』全3巻 丸山昇

汲古書院 2009年～ @10,500円

83『道草』 夏目漱石

岩波書店《文庫》1990年 525円

84『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』 川北稔

岩波書店《文庫》2008年 1,155円

さ行

- 38『雑誌のカタチ——編集者とデザイナーがつくった夢』 山崎浩一
工作舎 2006年 1,890円
- 39『死を見つめる心——ガンとたたかった十年間』 岸本英夫
講談社《文庫》1986年 470円
- 40『時代の目撃者——資料としての視覚イメージを利用した歴史研究』
ピーター・バーク
中央公論美術出版 2007年 3,780円
- 41『柴田和子正々堂々のセールス』 柴田和子
東洋経済新報社 1992年 1,365円
- 42『「自分探し」の移民たち——カナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』
加藤恵津子
彩流社 2009年 2,520円
- 43『上海時空往来』 莊魯迅
平凡社 2010年 1,680円
- 44『書物の変——グーグルベルグの時代』 港千尋
せりか書房 2010年 2,520円
- 45『白』 原研哉
中央公論新社 2008年 1,995円
- 46『新解さんの謎』 赤瀬川原平
文藝春秋《文庫》1999年 539円
- 47『成長の限界——ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』
ドネラ・H・メドウズほか
ダイヤモンド社 1972年 1,680円
- 48『生物から見た世界』 ユクスキュル、クリサート
岩波書店《文庫》2005年 693円
- 49『世界の日本人ジョーク集』 早坂隆
中央公論新社《新書》2006年 798円

- 50『戦後美術盛衰史』 針生一郎
東京書籍 1979年 924円

- 51『荘子』 莊子
徳間書店《文庫》2008年 999円

た行

- 52『大学生の自己分析——いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために』
宮下一博、杉村和美
ナカニシヤ出版 2008年 1,575円
- 53『知識デザイン企業』 紺野登
日本経済新聞出版社 2008年 1,995円
- 54『知に働けば蔵が建つ』 内田樹
文藝春秋《文庫》2008年 649円
- 55『デカルト著作集』第2巻・第4巻 デカルト
白水社 2001年 @7,875～7,980円
- 56『天国までの百マイル』 浅田次郎
朝日新聞社《文庫》2000年 499円
- 57『ドゥルーズの思想』 ジル・ドゥルーズ、クレール・バルネ
大修館書店 1980年 1,680円
- 58『図書館愛書家の楽園』 アルベルト・マンゲル
白水社 2008年 3,570円
- 59『泥棒日記』 ジャン・ジュネ
新潮社《文庫》1990年 740円

な行

- 60『なぜ女は昇進を拒むのか——進化心理学が解く性差のパラドクス』
スーザン・ピンカー
早川書房 2009年 2,415円

13『ガイアの復讐』 ジェームズ・ラブロック

中央公論新社 2006年 1,680円

14『外国語学習に成功する人、しない人——第二言語習得論への招待』

白井恭弘

岩波書店 2004年 1,155円

15『害虫の誕生——虫からみた日本史』 瀬戸口明久

筑摩書房《新書》2009年 756円

16『河童が覗いたヨーロッパ』 妹尾河童

講談社《文庫》2001年 630円

17『体の贈り物』 レベッカ・ブラウン

新潮社《文庫》2004年 539円

18『ガリヴァー旅行記』 スウィフト

岩波書店《文庫》2001年 714円

19『環境を知るとはということか——流域思考のすすめ』

養老孟司、岸由二

PHP研究所《新書》2009年 840円

20『桐島、部活やめるってよ』 朝井リョウ

集英社 2010年 1,260円

21『気流の鳴る音』 真木悠介

筑摩書房《文庫》2003年 945円

22『近代科学の源流』 伊東俊太郎

中央公論新社《文庫》2007年 1,050円

23『近代彫刻史』 ハーバート・リード

言叢社 1995年 3,567円

24『グイン・サーガ』全130巻 栗本薫

早川書房《文庫》1979～2009年 @420～609円

25『Googleの正体』 牧野武文

毎日コミュニケーションズ《新書》2010年 819円

26『グリーン資本主義——グローバル「危機」克服の条件』 佐和隆光

岩波書店《新書》2009年 735円

27『芸術の哲学』 渡邊二郎

筑摩書房《文庫》1998年 1,365円

28『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション——誤解・失敗・すれ違い』

久米昭元、長谷川典子

有斐閣 2007年 1,890円

29『言語のレシピ——多様性にひそむ普遍性をもとめて』

マーク・C. ベイカー

岩波書店《文庫》2010年 1,491円

30『現代芸術のエポック・エロイク——パリのガートルード・スタイン』

金関寿夫

青土社 1991年 2,446円

31『幸福な王子』 ワイルド

新潮社《文庫》2003年 459円

32『語学者の散歩道』 柳沼重剛

岩波書店《文庫》2008年 1,050円

33『ゴダール、わがアンナ・カレーナ時代』 山田宏一

ワイズ出版 2010年 2,940円

34『ことばの宇宙への旅立ち——10代からの言語学』全3巻

大津由紀雄

ひつじ書房 2008～2010年 @1,365～1,680円

35『子どもたちに語るヨーロッパ史』 ジャック・ル・ゴフ

筑摩書房《文庫》2009年 1,155円

36『子どもの絵はなぜ面白い——お母さんが子どもを理解するために』

安斎千鶴子

講談社 1986年 2,625円

37『これ、誰がデザインしたの？』 渡部千春

美術出版社 2004年 2,000円

「本を読もう!」ブックリスト その ③

(2010.12.1 現在)

あ行

- 1 『I・N・R・I・』 セルジュ・ブラムリー、ベッティナ・ランス
新潮社 1999年 9,975円
- 2 『足でつかむ夢——手のない僕が教師になるまで』 小島裕治
ブックマン社 2008年 1,299円
- 3 『アメリカ下層教育現場』 林壮一
光文社《新書》2008年 777円
- 4 『安心して絶望できる人生』 向谷地生良、浦河べてるの家
日本放送出版協会《新書》2006年 777円
- 5 『隠蔽捜査』 今野敏
新潮社《文庫》2008年 619円
- 6 『宇宙を復号(デコード)する——量子情報理論が解読する、
宇宙という驚くべき暗号』 チャールズ・サイフェ
早川書房 2007年 2,310円
- 7 『宇宙怪人しまりす医療統計を学ぶ』 佐藤俊哉
岩波書店 2005年 1,260円
- 8 『うらなり』 小林信彦
文藝春秋《文庫》2009年 539円
- 9 『エディターシップ』 外山滋比古
みすず書房 2002年 3,150円
- 10 『惜みなく愛は奪う』 有島武郎
岩波書店《文庫》1980年 400円
- 11 『音を視る、時を聴く「哲学講義」』 大森荘蔵、坂本龍一
筑摩書房《文庫》2007年 1,050円
- 12 『乙女の密告』 赤染晶子
新潮社 2010年 1,260円

デザイン 木下 弥

本を読もう！「第三集」

―きみたちに読んでほしい本を3冊あげると―

二〇一一年三月十九日発行

発行 和光大学附属梅根記念図書・情報館

〒一九五―八五八五 東京都町田市金井町二二六〇

TEL…〇四四―九八九―七四九四

FAX…〇四四―九八九―二二五〇